

東彼杵のひと

vol.7

ごじろ さとる
後城 覚さん

茶農家
1948(昭和23)年生まれ
菅無田郷出身・在住



町内各所の茶畑で、多くの人々が一番茶の収穫に汗を流した4月下旬。ひときわ特別な思いで新茶の季節を終えようとする人がいました。今年を最後にお茶作りを引退するという、菅無田郷の後城覚さんです。

農家の長男に生まれて

後城さんは、この地でおよそ60年にわたり、お米とお茶を作り続けてきました。「親の時代はお米とお茶の栽培、肉牛もしよった。昔は今と違って、長男が後継ぐのが当たり前のような時代やったけん、自然と同じ道に進んだね。お茶の加工はよそに任せて、栽培だけしよったと」

40代で茶工場を開設

牛舎があった場所に工場を作り、栽培から荒茶加工まで一貫して行うようになったのは、働き盛りの40代のころ。「ここは山間地で霧の多かけん、何よりお茶が一番よう育つ。町全体にもお茶作りの機運が高まったし、いっちょ頑張ってみゅーか、と思って。他に比べたら小さな規模けどね」

それまで主流だった釜炒り茶ではなく、新しい時代が求める"蒸し製"の機械を導入し、最盛期には1番茶から3番茶まで、収穫と加工に精を出しました。

農業 × 土木建築

若い頃から農作業が一段落する冬場は、土木建築の仕事に励んできた後城さん。建築機械の免許を持っているので、75歳の今もあちこちの現場で引っ張りだこです。建設会社の仕事では、町内の展望台や宅地の造成、土砂災害の復旧にも携わってきました。

その能力は農業にも大いに役立ったそうです。自ら重機で荒地を開墾し、石垣を築いて茶畑を大きくしたり、整備して機械の入る畑に変えたり。自分の畑だけでなく町内全体の農地整備に取り組み、作業しやすく生産性の高い畑づくりに貢献しました。



現場で後城さんになついた、珍しくてかわいい猪との思い出。



寂しさはあるけれど

「お茶ば辞めると思えば、やっぱり寂しか。でもだんだんと思うように働けんやったり、体力の限界ば感じることも増えてね。後期高齢者になったし、あんまり無理せんで元気なうちに、幕引きしたがよかなと思って決断した。肥料も燃料も値上がりして、お茶の値段は上がらんごとなつて、商売として難しゅうなったこともきっかけの一つね」



「この休憩室は、仕事終わりに1人で焼酎飲むのにも最高よ」

家族と仲間感謝

「これまでずっとお茶作りばしてこられたとは、手伝ってくれる家族と仲間のおかげ。茶摘みの時期には、毎年子どもと孫たちが泊まり込んで加勢してくれた。近所の仲間もずっと来てくれた。この休憩室で、昼休みにみんなで弁当

食べながら語ったり笑ったりする時間は、一番の楽しみやったね」。茶畑が見渡せる茶工場横の休憩室は、これまでの思い出がたくさん詰まった、後城さんの特等席です。



早朝7時半頃、わずかな時間だけ見られる幻想的な光景。

元気なうちは働くよ

最後にお茶作り引退後のこれからの過ごし方について尋ねました。「米作りは続けるし、土木建築の仕事も声が掛かる間は行くよ。元気なうちは働きたかね。よその茶畑の手伝いも、グラウンドゴルフにも行きたか。まだまだしばらくは忙しかなあ」そう話す後城さんの笑顔は明るく輝いていました。

後継ぎ募集!

引退に伴って「希望者があれば茶畑や荒茶加工の工場を引き継ぎたい」と後城さん。年々人気が高まっている、おいしいそのぎ茶の作り手になりませんか?